令和三年度別府市小・中学生「人権作文」入賞作品

別府市長賞

障がいは個性

別府市立朝日中学校一年　中野　志織

私の祖母は、私が生まれる前から車いすに乗っています。祖母は生まれてからずっと車いすで生活しているわけではなく、四十八歳の時に病気で右半身が不自由になり、車いすでの生活が始まったと母から聞きました。つまり祖母はそれまで私たちと同じように、行きたいところに、一人で行くことができていたし、車の運転もしていたそうです。そして、とても手芸が得意で、子どもの頃の母の洋服はすべて祖母の手作りだったと母から聞きました。そんな祖母が病気のためにすべての自由を一瞬でうばわれてしまったのです。しかし、そのようなつらい状況の中でも祖母はあきらめることなくリハビリに取り組んだそうです。発症から二十年経った今でも、毎日リハビリを頑張っています。そんな祖母ですが、今でも車いすに乗っています。

先日、祖母と一緒に食事に行きました。お店は少し混み合っており、祖父と話して、食事をせずに帰ろうかとも考えましたが、少しお客さんも減ってきたので、勇気を出して三人でお店に入ることにしました。入ったとたん、車いすの祖母を見て、店員さんが少しイヤな顔をしました。そんな店員さんの表情を見て、私と祖父、もちろん祖母も悲しい気持ちになりました。その後、その店員さんに席を案内され、他のお客さんに少し見られていたので、早く注文して早く食べて帰りたいと思いました。祖母も同じような気持ちだったのか、急いで食べようとしていました。ですが、祖母は左手で食べるので早く食べることができませんでした。そんな祖母を見て、私は、みんなと違うからといって、なぜこんなに悲しい気持ちにならないといけないのか、祖母は好きで不自由になったわけではないのにと怒りを覚えました。そんな、悲しそうな顔をした私を見て、祖父

が、
「人は人。自分は自分。人からされてイヤなことは人にしない。自分に人からされてうれしいことは人に返そう。」
と言ったとき、となりの席のお客さんが、
「少しせまくないですか？もしよければもう少しこちらへ寄りませんか？」
と笑顔で私たち三人に話しかけてきてくれました。私たちは、
「ありがとうございます。」
と伝え、少し広く座ることができました。そして、祖母は不自由な体でしっかりご飯を食べることができました。そのお客さんの優しい一声で食事を美味しくすることができました。食事を終えた私たちは笑顔でそのお客さんに、
「本当にありがとうございました。」
と伝えると、そのお客さんは私たち以上の笑顔で、
「いいよ、いいよ。」
と言ってくれました。
　私は、体が不自由なことは特別ではなく一つの個性だと思います。私にも良いところ、悪いところがあります。みんなそうです。だからこそ、家族や友だちに困ったときは助けてもらっています。みんなが人を思いやることができれば、もっともっと楽しい社会になると思います。祖母に優しい言葉をかけてくれたお客さん、そんなふうに人が困っている時に、声をかけられるような大人に私はなりたいです。そうすることで、一人一人の個性が出せるような世の中になればよいと私は思っています。